

季刊

2010 | 冬

# 自治と分権

首長インタビュー●西川一誠さん(福井県知事)

no. 38

Wインタビュー「民主党政権の動向と新自由主義の転換点」

## 日本が直面する課題

渡辺 治(一橋大学教授)+後藤道夫(都留文科大学教授)

[研究機構10周年記念シンポジウム]

### Part5 人が輝き豊かにくらすシンポジウム

塩見 昇(日本図書館協会理事・大阪教育大学名誉教授)+大澤 豊(こぶしプロダクション代表「いのちの山河～日本の青空II」監督)+中嶋 信(徳島大学大学院教授)

夕張市の財政再建の取り組み状況と地域・自治再生への課題

西村 宣彦(北海道学園大学准教授)

著者に「肝」を聞く⑧

堤 未果著『ルポ 貧困大国アメリカ』(岩波新書)他



# 「未来への地方自治」

西川一誠さん (福井県知事)

●インタビューアー 三橋良士明 (静岡大学教授・研究機構代表委員)

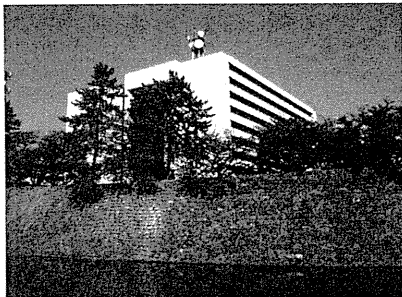
## 「ふるさと」の発想とは？

—今日の日本はおかしい。地方から改革を

三橋—知事は、『ふるさと』の発想」を提唱されていますが、この概念は、「こんにちの地方・地域の現状を見る視点と同時に、これからの一つの希望的概念であり、知事としての日々の生活の中から生まれた発想だ」とされています。知事になられて2期目になりますが、まず、『ふるさと』の発想」に至った思いについてお聞きます。

西川—最近、「この日本は一体どうなっているんだ。制度もおかしいし、人もおかしくなっているのではないか」という言い方を多くの人がします。「日本は老大国となり、すでに制度疲労が生じている」などと言われてたりもしますし、また、国際的な発言力にも欠け、「きちんとしたリーダーシップが執られているか」ということもあります。『本当に今の日本を何とかしなければという気持ちで日本列島を見渡すと、これではいけない。地方から改革しなくては』という想いです。

そのためには、まず、中央や東京から地方を見て、「地方のあそこがよくない、



福井県庁舎

ここを直せ」という発想ではなくて、地方はそれぞれ頑張っているんだから、「地方の活動を生かすために、国がしかるべき応援と責任を果たす」という思想をもつべきです。これが1つ目です。

2つ目は、「地域で」「地域の医療」「地域の教育」「地域ぐるみ」など美しい言葉で「地域」が語られますが、意外と内容はあいまいです。むしろ、「中央と地方」「都市と田舎」などのはっきりした観念で、いちど「ふるさと」を定義し直したらどうかということです。

3つ目は、イデオロギーに関係します。東西冷戦、社会主義、資本主義などがありますが、イデオロギーが消滅しつつあります。しかし、<sup>よ</sup>拠りどころをもつにしても、すぐに「国家」などへ行くべきではなく、さりとて無思想で行くわけにもいきません。「ふるさと」というと、古いという印象があるかもしれませんが、自分たちの住んでいるこの場所を、内へはアイデンティティのような誇り、外へは働きかける自信の源、という新しい観念でとらえ直す必要があります。

4つ目は、地方自治には、「分権化」という政治的な動きやシステムはありますが、希望をもって活動する人間像が非常にあいまいで、およそ論じられていません。ふるさとで活動する力強い心情をもった人間像を、おぼろげであっても意識する必要があると思います。



西川一誠知事

#### 西川一誠（にしかわ いっせい）さんのプロフィール

1945年（昭和20年）福井県生まれ  
1968年（昭和43年）京都大学法学部卒業 自治省入省  
1995年（平成7年）福井県副知事  
2003年（平成15年）福井県知事就任 現在2期目



三橋良士明（みつはし よしあき）氏  
研究機構代表委員

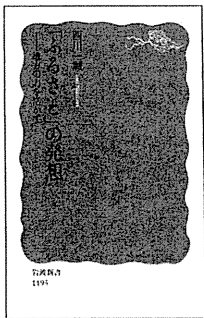
とくに、2つ目に関係しますが、都市と地方は支え合っています。地方は人材、電力や米、水などを供給しています。昔は集団就職などがあり、都市からみても、地方から「金の卵」、貴重な人材をもらっていることが意識できました。しかし、今はそういうものが見えなくなりました。

大切なことは「助け合っていこう」ということです。都市から地方にお金を仕送りしているようなとらえ方は真実でない。こういう考え方で『「ふるさと」の発想』（岩波新書）を書きました。三橋——なるほど、「希望」とは都市と地方を結ぶ新しい「つながりの再生」ですね。こういう概念で地方の実情を見たときに、知事にとってのいちばん大きな課題は何ですか。ご著書では、地域の住民の暮らしの実情や地域産業の課題などについて指摘がありました。

西川——少子化・高齢化という大きな流れや、新自由主義・市場万能主義のなかで、地方経済が疲弊して、中心市街地などが寂れている現象は各地で共通しています。財政の問題では、三位一体改革で税源は多少は移りましたが、補助金以外に交付税までもそれ以上に大幅に減らされて、元も子もなくなりました。このような財政的な疲弊という問題もあります。

三橋——確かに、この間、新自由主義的な市場原理を基調とした改革が進められ、市町村合併をはじめ自治体改革も、構造改革的な枠組みのなかで進められました。それが地方と都市の格差を生んだように思います。福井県での現れ方はいかがでしょうか。

西川——急速なグローバル化と地方の関係は深刻です。福井県は、眼鏡や繊維の産地ですが、中国で商品を作るよう



『「ふるさと」の発想  
—地方の力を活かす—』  
岩波新書

になったのでブランド化が遅れました。今はだいぶ立ち直りつつありますが、繊維はかなり壊滅的な影響を受けています。地場産業の衰退です。福井の伝統産業にもそういう問題が起きています。

本当は中心市街地を活性化しなければなりません、福井県でも低価格量販店や大手スーパーが進出するなど郊外化が進み、福井市の北部には副都心のようなところが出ています。そういう状況で、中心市街地の来客が2分の1や3分の1となってしまう、デパートは1店だけが頑張っている状態です。

一方で、新幹線がいま一步のところに来ないので、活性化と言ってもなかなかですね。

三橋——新幹線問題ですね。

西川——福井にはまだ新幹線がありません。今は米原まで行って乗り換えています。計画はずっとあるわけですが、民主党政権で白紙として止まったりしていて、なかなか思うように進みません。地方の頑張りを支える基盤は最小限必要なものです。

財政、農業、商店街、まちづくりなど課題は山積です。公共事業はかつての事業の約半分に減っています。

三橋——そういう実態のなかで、地方の自治体にできることは何でしょうか。

西川——そうですね。今は借金も多いですが、財政運営上、借金のすべてが悪いということではありませんので、少しずつ減らすという手法で管理をして、収支が拡散しないようにしています。本県の財政の健全性は全国中位程度で、あとはどうコントロールしながら管理するかです。

三橋——都市と地方の格差を是正する意味で、地方交付税制度があります。この間の三位一体改革はどう評価されておりますか。

## 三位一体改革は実が失われた

——公共事業で福井に必要なものは限定的

西川——地方交付税は国からの「交付」という名前になっていますが、全国の地方共有の地方税とほぼ等しい財源なので充実すべきです。三位一体改革は、名を取って実が失われた感じです。本当は三位は一体ではありません。税と補助金は表裏のセットで考えるべきでしたが、交付税は別の話です。平成16年度にいきなり減らされた際は大変でした。

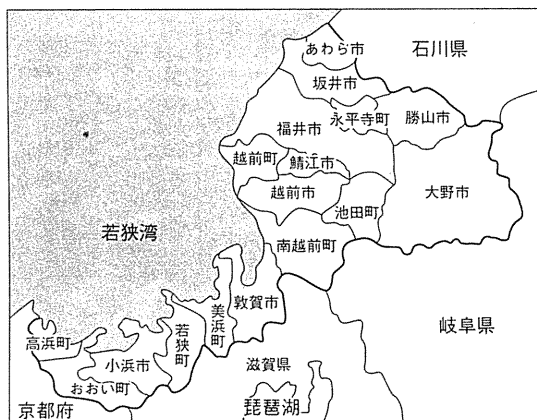
公共事業には、抽象的に考えて要るものと要らないものの程度があります。福井県には、「舞鶴若狭自動車道」があります。「高速道路株式会社」がやっていて、小浜を通って敦賀まで、数年で北陸自動車道と結ばれます。そうすると、福井県の「越前」と「若狭」が一体になり、京都や兵庫を通して小浜や敦賀・福井へ行けるようになるので非常に立地条件がよくなります。

もう1つは、勝山から名古屋へ行く基幹道が完成すれば、立地条件つまり境遇がよくなります。あとは新幹線だけです。公共事業で必要なのはそれだけです。あとは皆で少し

ずつ工夫すればいいと思っています。

三橋——なるほど、都市と地方をつなぐ交通体系の整備が、地方にとっては大きな課題であるということですね。

西川——はい、それだけは国の責任できちんとした実行が必要です。今でもかなり車社会になっているわけですが、とくに田舎ではそうです。福



井は、1世帯当たりの車の所有台数が日本一です。多いところでは5台所有しています。鉄道はJR以外では、福井鉄道とえちぜん鉄道の2つが残っていますが。

三橋——モータリゼーションによって公共交通が衰退するわけですね。

西川——今は、何とか新しい交通を守

っています。低料金のコミュニティバスもあります。県立音楽堂、生涯学習センター、大学、産業会館、図書館など、バブル前後に土地の安い郊外に公共施設を配置しました。そのため使い勝手が悪い。そこで、私が知事になってから、駅前から図書館まで30分ごとに無料のバスを走らせました。

三橋——地方の人口を維持するためには働いて生活する場をつくらなければなりません、その辺りはいかがですか。

西川——そうですね。私は、ふるさとの問題点や必要性を挙げましたが、なぜ「ふるさと」ということを思いついたか、という意味では、福井県は、共働き率の高さや三世代同居など、山形県などととてもよく似ています。共働き率が高くて、家族で助け合うというコミュニティ、地域の結びつきがあります。福井県は、学力・体力ともに日本一です。教育の力です。また、地域が安全・安心で、凶悪な事件もありません。そこを何とかして残したいという気持ちがありました。それは、「ふるさと」の積極的な意味です。福井にはそういうものが残っていて、これからも大事にしていこうという感じです。

三橋——『「ふるさと」の発想』は都市と地方の新しい見方でもあるということですね。「地方分権改革」は東京一極集中の排除を目標の1つとして進められてきたはずですが、そうなりませんでした。



コミュニティバス  
福井駅と県立図書館を30分ごとに無料で連絡している「フレンドリーバス」。各市町では公共施設を結ぶコミュニティバスを運行しています。

## 「均衡ある発展」を放棄して、 今は国土構想が存在しない

西川——今回の国土形成計画で、遂に国土構想なるものが消滅しました。「地域資源の有効活用」「均衡ある発展」「格差是正」など、国土構造をつくる気がなくなり、国土づくりの構想がないことが今の問題だと思います。

まずは、最終的なネットワークを早く完成させなければなりません。そうしないと外国との競争にも負けると思いますし、大災害など防災上の問題があります。

さらに、地方が考えたことを応援するシステムをつくらなければなりません。そして、国外へ流出している企業を地方に立地させることが大事です。

また、人材の問題です。ここ20年ぐらいで人間がコストになってしまいました。中国の賃金が日本の10分の1だとか、会社が人間を構成員とは思わなくなりました。非正規労働からくるひずみや貧困などの問題が起こっているのはそのせいだと思います。

国土計画というのは、人と国土の計画です。もう1回仕切り直さなければならないと思っていますが、新しい政権もまだそっちの方向までは行っていませんね。「公共事業は削る」というレベルで、計画がありません。

## 道州制は経済主義に偏った思想

### ——道州は自治体ではない

三橋——最近、「道州制構想」によって地域間競争を促進させる方向が出ています。知事は、『中央公論』に昨年の夏、「幻想としての道州制」という論文をお書きになっていますし、関西での講演が県のホームページに載っていました。道州制についてお聞かせください。



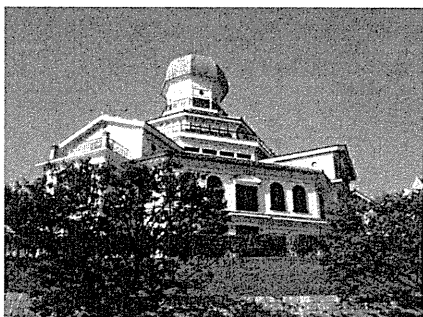
西川——私は、道州制には消極的で、反対です。道州制は、経済主義に偏った思想だと思います。規模の論理というか、大きくすればコストが下がってうまくいくという考え方でしょうが、「皆で政治をやろう」という思想ではありません。そして「究極の分権が道州制だ」と、わけのわからないスローガンでさえ言われていますが、おかしいと思います。大きな自治体の様子を見るとわかりますが、どうしても行政が縦割りになると思います。土木は土木、水道は水道という縦割りで、自治体的ではない様子になっているところがあります。

組織論で言えば、重厚長大の企業的な理論です。まず大きくして、コストカットをしたり事業をやっていくという発想です。

道州制の理論のなかには、「国の面倒な仕事をどこか地方へ持っていけないか」「大事な指示はするけれど、細かいことは地方がやったらいい」、チェックは国がするという発想もあるのではないのでしょうか。国の出先機関がたくさんあってその人員を転換することはできないために、分権で仕事をあげますよという形になる。しかし、人や仕事は来ても、財源はきっとその通りには来ないでしょうね。そういう隠れた本質的な問題があると思っています。

国はもっと行革をしなければなりません。しかし、その手段として、道州をつくって事務を地方に押しつける意識があるのは、いかがなものかと思います。

福井県の例でいえば、40人の議員がおられますが、道州制ができれば福井からはせいぜい4、5人でしょう。民意が反映されないし、周辺は見捨てられると思います。



三国湊

江戸後期から明治前期にかけて北前船の寄港地として繁栄した三国湊は、豪商の旧家跡や銀行などの町並みが保存され、当時のにぎわいを今に伝えています。写真の「みくに龍翔館」は湊が最も栄えた明治12年オランダ人技師エッセルの設計により建設された「龍翔小学校」を復元したものの。5層8角のモダンな建物は現在、博物館として公開されています。

三橋——今よりも、住民の意見が反映しなくなる。

## 道州制は「大都市化」=大都市中心と 経済界の効率主義の合体

西川——そして、東京や大阪など都市の道州と、地方の田舎の道州との格差も出てくると思います。きっと、「財源は自分で都合をつけろ」と言うでしょう。田舎の道州のなかには、税金を十分に集めようがないところもでてくるでしょう。こうした税財政の問題や、住民から遠くなるという住民自治も問題になると思います。

もう1つ考えるべきことは、道州制論が出る政治エネルギーのもとです。なぜそういうものが出てくると思いますか？ いろいろと理由がつけられていますが、実際は、道州制は主に大都市化で論じられています。

今、大都市の例をとると、大きな政令指定都市があり、複数あるところもあり、人口の半分以上が集中してしまう。そうすると、県も仕事のやりようがありません。政令市が地域全体の中心になるということです。だから、圏域をもっと広げてやりたいというエネルギーが自然に出てきます。それと経済界の効率主義が一緒になって、エネルギーとして出ている。

そして、「究極の国のかたち」だとか、一般的なシステム論が出てきますが、私たちにとっては傍<sup>はた</sup>迷惑です。日本にとってもよくないと思います。

三橋——大都市中心や効率主義では、地方の個性やまとまりが解体されるおそれがあります。

西川——日本という島国は、周辺にロシア、中国、韓国、さらに太平洋を挟んでアメリカがあり、統一していなければならぬ立場にあります。今さら道州に分かれては国家の力も弱まるし、そういう構造になると、地方自治の質も

住民の福祉のレベルも下がると思っています。グローバル化という国際的な関係のなかでは、逆向きだと思います。三橋——道州制構想は地域間格差を拡大するものであり、根底には大都市中心と経済界の思惑があるということですね。

西川——推進している人が、そこをはっきり意識しているかどうかです。意識していれば自覚的だからまだいいですが、

心情的に「何となくそうかな」と思っているとすれば、戦前の「金解禁」の論争を例に挙げるまでもなく、付和雷同型の物事をよく考えない政治になるかもしれません。

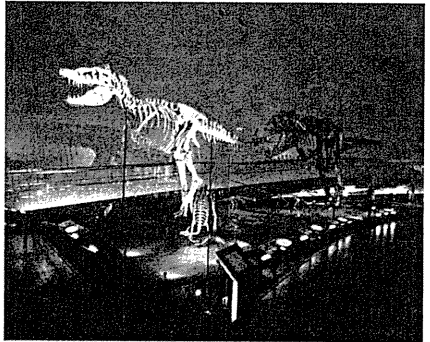
三橋——さて、いわゆる第二期地方分権改革ですが、3年間で分権一括法を出す予定になっています。「義務付け・枠付け緩和」の答申が出ていて、道州制はその先になるでしょうか。方向性が不透明になっているような気がします。

第二期分権改革の進行、改革の先についてどうお考えでしょうか。

西川——新しい政権で国と地方の協議機関を設置することなので、それは着実にやってほしいと思います。きょうのニュースでは「保育所の設置基準の緩和」などが出ていました。仕事を移しても、次から次へといろいろな仕事が起こってくるし、条例制定もあるし、キリがないでしょう。国と地方の権限のやり取りは永遠の課題です。

## 国と地方の関係を日常的に考える

西川——重要なのは、地方が具体的に自治権をもつかどうかです。私は、全国知事会の憲法問題特別委員会で委員長



県立恐竜博物館

恐竜に特化した博物館のなかでは世界で3本の指に数えられる福井県立恐竜博物館は、日本最大の恐竜化石の発掘地・勝山市にあります。当地で発掘されたフクイザウルス、フクイラプトルの全身骨格や復元ジオラマ、千数百点もの標本等が展示されており、2010年7月、開館10周年を迎えます。

を務めています。本当は憲法を直さなければだめなくらいですが、そうなると、すぐに「9条」の問題になるのですぐには進まない。何とか地方自治のところを強化したい。「地方自治の本旨」と書いてありますが、立法上のレベルではなく、「憲法的な保障」が必要でしょう。

日本には衆議院・参議院があります。1つの構想ですが、例えば参議院で地方自治を優先的に議論するというか、地方自治を重視した論議をするのは、次善の策として、習慣あるいは慣習法のようなシステムとしてあるのではないかと思います。

三橋——一応、日本国憲法では、セントラルガバメントに加えて、自治体もガバメントとして位置付けています。

西川——いや、実質はどうでしょうか。私はマニフェストで福井県として地方政府を樹立すると書いていますが。

三橋——一般的には、学説などで承認されていて、実体が問題になってくると思います。「地方自治の本旨に基づいて、地方公共団体の組織・運営は法律で定める」ということで、問題は、法律で定める際の基準たる「地方自治の本旨」です。一般に、通説では団体自治と住民自治ということになっていますが、それを実質化する議論が必要だということでしょう。

西川——そういうことに絶えず関心をもつ「代表」があるとありがたいですね。

一部では、都市部の知事からは知事が参議院議員になればよいという議論も聞いたことがあります。憲法上の問題になります。難しいですね。

三橋——確かに、国政の場では、地方自治のあり方、憲法の描いている「地方自治の本旨」などを議論する場が少なく、地方自治そのものに対する理解がたいへん不十分な国政運営、そして、国政をつかさどる政治家にもそういうと

ころが見られるということでしょうね。

西川——フランスの上院議員で、コミューンの村長をして、デパルトマン=県の副議長をしている人の話を読んだことがあります。日本で言うと、参議院議員が町長をしながら県会議員を兼任しているようなものです。

フランスは中央集権的な制度といわれますが、国政の場の人単に選挙民とつながっているだけでなく、意外と地方のことをよく知っているのかもしれませんが。ドイツも兼職していますね。日本の国会議員は、制度的問題もありますが、地方自治についてはどうでしょうか。馴染みが薄い感じがします。

三橋——地方の意見を国政に反映する場やシステムの不十分さ、機能不全は確かにありますね。

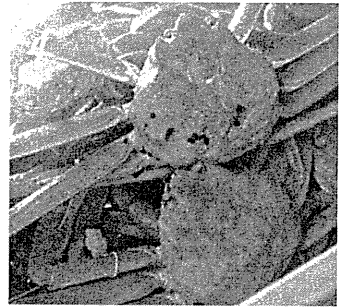
西川——今の制度では、国は自らの行動に関して、ある政策について地方自治体がどう感じるか、とか、どう困るか、という実感的な発想が浮かばないのでしょうか。今の日本には、それをうまく機能させる日常的な制度がありません。

三橋——一応は、全国知事会などの「地方六団体」のように、自治体の首長などの団体が意見を言う組織はありますが、実質的にはなかなか難しい状態でしょうね。

西川——全国町村会は、「道州制には断固反対」と言っています。

三橋——町村会はそうですが、知事会の現状はどうでしょうか。西川知事は、いろいろと問題提起されてこられました。全体としては……。

西川——いろいろですね。選挙前のことですが、あまり無用の混乱をしたくないので、とりあえず8県の知事の道州制慎重派の意見を、兵庫県知事と一緒に自民党と民主党、公明党の代表に持っていきました。道州制論はいろいろな



#### 越前がに

日本海の冬の味覚の王者「越前がに」。急深な越前海岸の地形と厳しい冬の気候がカニの身を引き締め、味を良くしていると言われています。また、漁場が港に非常に近いため、生きたままの新鮮な状態で水揚げされることも越前がにの特徴のひとつです。



福井うまれのコシヒカリ

日本を代表するブランド米「コシヒカリ」は、1956年に福井県農業試験場で品種開発され、「越の国にひかり輝く米」の願いをこめて命名されました。1979年以降は品種別作付面積全国1位を保持しています。

意味で大都市からの意見であり、大都市改革が必要だと言いました。指定都市には何百万人もいますが、内部の「区」のレベルで、もう少し自治がなければだめではないかと思えます。

三橋——国政の場では、この間、「地方分権改革」が進められてきましたが、地方の意見は反映されていないとお感じですか。

西川——十分には反映されていません。日々法律や予算が通りますが、そのときに、「国と地方はどういう関係になるか」というものが実感としてないので、結局一律のものができやすい。地方も意見は言えることにはなっていますが、どんどん新しいことが来るからキリがありません。今度の「子ども手当」、後期高齢者医療制度廃止、高校授業料の無料化など、いったいどうなるか懸念しています。「通達」ではないですが、毎日のように、「指導上、お伝えします」と、次から次へと来ています。これらは、すべて地方自治にかかわります。

先週、フランスのストラスブールに行きましたが、47カ国の自治体間連合である「欧州評議会地方自治体会議」という組織があります。ヨーロッパには20万の自治体がありますが、その代表が集まる会が年2回開かれます。知事会レベルと市町村議員レベルがありますが、招待を受けて日本の地方自治や福井県についても話しました。

あわせて、環境の勉強をしてきましたが、現地案内は大学の先生でした。その人は、州の環境の公務員なのに、「今住んでいる村の村長をボランティアで7年間していた」と言っていました。ドイツは今、町村合併を進めているようです。小さい2、3千人のところを1万人ぐらいにするもので、「今度、4つが集まって約1万人の町にする」と言っていました。

日本は、国と自治体がしっかりと分かれていて兼務はありませんが、もう少し定常的に地方自治を守るシステムが必要でしょう。

## 自治体としての都道府県の固有の役割は？

——国の中央集権的な行動をガードする

三橋——国と地方の関係で、地方自治に対する国の政策のあり方についてお話がありました。それで、地方自治体のほうに目を転じたときに、日本の地方自治制度は、現行の枠としては、広域自治体としての都道府県と市町村があります。

ところが、都道府県を廃止して、道州制が構想として出ています。都道府県知事の発言は大きな意味をもつと思います。都道府県の果たす固有の役割についてどうお考えでしょうか。

西川——補完性の原理や近接性の原理というのは、単純な発想ですが、学問的にもハッキリしないですね。地方自治の原点は基礎的自治体・市町村にあるとは言いますが、市町村というと数千人の町から数百万人の政令市まであります。しかし、今回の平成の大合併では、小さいところはあまり進まずに、大きいところが合併して指定都市を目指すほうが成功して、小さいところは合併できずに残った。そういう状況で、身近な課題は市町村でやり、県の役割は、補完的・広域的なことになりました。こういう伝統的な理論のほかに、県は固有の仕事をもつと同時に、国の中央集権的な行動に対して、県は1つの強い自治体として、外堀のように地方自治をガードしなければならないという課題もあります。

三橋——確かに、国の中央集権に対して1つの市町村で対抗するのは困難ですが、都道府県の力は大きいですからね。

地域の意見を反映した対抗軸を示すという役割になるでしょうか。

西川——国から、県を通さずに、1つ1つの自治体や団体、施設などに直接に補助金が行ったりします。1つ1つの自治体なり団体をとらえようとする、いわゆる「個人主義的」な考え方ですが、それだと地方の結びつきがおかしくなる。県の役割は、そういう中央集権的な動きに対するガードと地域の「まとまった意見」を構築することにあります。

今後は、教育や警察と並んで医療や介護の基本的なサポートなどの固有の仕事が増えると思います。県は、医療についてはほとんどやっていないので、もっとやるべきだと思います。医療・介護の問題は重要です。

三橋——確かにそうですね。地域医療の崩壊が起きています。

## 医療・介護、教育、子育てなど 市町村だけでは限界がある

西川——医療も市町村では無理な部分があります。医療ばかり言うと、押しつけられそうになるので難しいですが、きちんと財源を確保してやるべき時代だと思います。そして、人づくりです。教育や子育てなどは市町村では限度があります。小・中学校、幼稚園、保育園がありますが、市町村だけではたいへんです。高校は県で、安全・安心については警察です。

福井県では「ふくい3人っ子応援プロジェクト」で3人目の出産を応援しています。婚活などもありますし、病児デイケアといってお子さんが病気になったときに働くお母さんに代わって面倒を見たり、用事があるときに預けるなどの子育て応援もしています。そして小・中学校の30人学



級です。

また、景気対策や経済対策は多様で多岐にわたり、市町村では困難です。

三橋——医療問題の話がありましたが、市町村ではなかなかできないので、都道府県を単位として、責任をもって安心して暮らせるシステムをつくっていくという都道府県固有の役割が重要です。医療や教育、福祉については、いわゆるナショナルミニマムという考え方があります。そういう意味で、地方と都市の格差のなかで、国がどの水準まで保障するのかという問題は大きな課題です。都道府県は、市町村との関係では、地域において重要な役割を果たす必要がありますが、都道府県も非常に悩んでいるようですね。

西川——そう思います。とくに大都市は、もう少し住民自治をやらなければだめです。お年寄りの見守りやホームレス対策、選挙における低投票率、生活保護率の高さ、学校の授業料が払えないとかいろいろあります。百万人単位の組織ですから、区の単位で自治を確立しないと取り組めません。大都市の人のつながりの弱さも日本の不安材料でしょう。私たちの立場からも、大都市の弊害や不都合は地方の問題であり、あながち地方からのおせっかいではないでしょう。大都市の問題をやってもらわなければ困ります。毎年、学生など3千人の福井県民が大都市へ出て行って、1千人しか帰ってこないのですから。

## 「希望学」「総合長寿学」の研究

——地域で誇りをもって生き、老いていく

西川——豊かさや、これからの希望について話をします。福井県は、東京大学と共同で「希望学」の研究をしています。同学は、岩手県の釜石でもフィールドワークをしています。今、釜石市は非常に厳しいです。福井県は、生活水

準が割に豊かで、学力も高いです。そういう2つの地域での希望を研究しています。最終的には、ふるさとでのアイデンティティと同時に教育にもかかわります。そして、豊かさの指標をどうするかです。プータンが「GHP（ゼネラル・ハピネス・オブ・ピープル）」というものを示しています。そういう新しい指標をつくれませんか。

もう1つは、「総合長寿学」です。ふるさとをつくるときには、研究者からも意見をもらってレベルを上げる意味で、「総合長寿学」を研究しています。「エイジング・イン・プレイス」つまり、その地域で誇りをもって生きて、老いていくという学問です。

これからは、「人生90年」だと思います。初等の学習が30年、働く時間が30年、リタイアしていろいろやれる楽しみなどが30年です。そういう人の需要は、いろいろな産業的にも大事だと思います。介護にはそういう面がありますが、ふるさとづくりのサポートとしてそのように考えています。

三橋——なかなか壮大な取り組みですね。ところで最近、福井のふるさと政策推進の1つとして、「観光営業部」を設置して観光と農業などの積極的施策を打ち出しておられますね。

西川——福井県には、いいものがたくさんありますが、売り込みが上手ではないです。もう少し営業をしようということです。ある程度成熟したので、今、まさに売り込む時期です。公務員は、「こんなことまでしていいのか」と、躊躇ちゆうちよがあります。しかし、「営業」という名前を与えると、「ここまでやってもいいんだろうな」、周りも「営業だからいいか」ということで、思いきって活性化しようと考えて「営業」という名前をつけました。

議会ではだいたい議論がありましたが、明治以来、県庁レ

ベルで「営業」という名前がついたのは初めてでしょう。三橋——発想を変えて、より一層積極的ということですね。今日は、ふるさとの発想のお話から、道州制や都道府県の存在意義、国と地方の日常的関係のあり方・意識のあり方など、大きな地方自治をめぐってお話を伺い、さらに、



どうやって地域の活性化を行うのか、という積極的、壮大なお話も伺いました。最後に本誌『自治と分権』の読者にメッセージをお願いいたします。

西川——これからは、人口の大きい大都市の住民自治がとくに大事です。そこがうまくいかなければ地方に影響します。福井県の場合は保育所や特養の待機者はゼロです。第三次勧告の、「保育所の基準を緩和する」というのも保育所がつかれない大都市の話で、私たちにはほとんど関係ありません。大都市の住民が帰属意識をもって自治を発展させないと地方も迷惑しますし、道州制の話も出てくる。私たちは私たちが頑張るので、大都市では住民自治の新しい仕組みを発展させて欲しいと思います。その上で、都市と地方の連携やバランスのとれた発展がある。それを国が応援してゆくという逆のシステムが強まらなければならないと思います。

三橋——どうもありがとうございました。

#### 福井県の観光地

東尋坊(写真)、永平寺、あわら温泉、三方五湖など、多くの観光地があります。あわら温泉の某旅館の女将は、「福井って、自己宣伝が下手なのよね。東尋坊や永平寺なども福井県だということを知らない人が多いの」と。やはり、知事、県庁の果たす役割は大きいものがありそうです。